

# 日本語母語話者コーパスにおける 「わけにはいかない」の用法 —従来の日本語教育文法との比較から—

小嶋 香織・松田真希子<sup>注1</sup>

## 要 旨

日本語教育現場において、中級レベル以降で取り上げられることが多い「わけにはいかない」という表現形式は、日本語学習者の産出が非常に少ない形式の一つである。しかし、中上級レベルの日本語学習者にとっては書くレベルまでの定着が必要な表現形式でもある。本研究では、日本語母語話者コーパスにおける「わけにはいかない」の用例を分析し、前接する表現形式や前置動詞、前置副詞の頻度数から「わけにはいかない」に特徴的な用法を明らかにした。また、日本語教材における「わけにはいかない」の用例と、日本語母語話者の使用傾向との間には、ずれが生じていることも明らかになった。このことを踏まえ、本稿では日本語教育現場における「わけにはいかない」の新しい指導方法を提案する。

## 1. はじめに

形式名詞「わけ」を含む表現は、「もの」「こと」を含む表現と同様、日本語学習者が中級レベルで学ぶ項目の一つとされている。『旧日本語能力試験出題基準』にも、「わけ」を含む表現は3種類提示されているため、中級レベルの日本語学習教材にも取り上げられることが多い。しかし教育現場での日本語学習者の産出状況を見る限り、「わけにはいかない」は上級レベルの学習者であっても産出されにくい表現形式である。

近年さまざまなコーパスが整備され、その膨大なデータを分析することで、従来の日本語教育文法を見直す研究が行われている。「わけにはいかない」においても、日本語母語話者コーパスから得られたデータを基にし、特徴的な用法を明らかにすることで、日本語教育場面における、より学習者に定着しやすい指導方法を探ることができるのではないかと考える。

そこで、本研究では「わけにはいかない」を含む表現がどのように日本語学や日本語教育現場で記述されているかということを明らかにした上で、母語話者と日本語学

習者の産出データを分析し、教育への提言を行う。

## II. 「わけ」を含む表現と「わけにはいかない文」

まず、「わけ」を含む表現について確認する。形式名詞「わけ」を含む表現は、『旧日本語能力試験出題基準』2級の文法項目となっており、3種類に分類されている(表1)。

なお、表左の番号1), 2), 3) は筆者が付けたものである。

表1 『旧日本語能力試験出題基準』における「わけ」を含む表現

1) わけがない／わけはない
2) わけだ／わけではない／わけでもない
3) わけにはいかない／わけにもいかない

本研究ではこの分類に従い、番号1)の表現2つを「わけがない類」、2)の表現3つを「わけだ類」、3)の表現2つを「わけにはいかない類」と呼ぶことにする。

ただし、表1の中の8つの表現形式をのみを調査対象とするのではなく、それぞれの表現形式が含まれるものは、すべて調査対象とした。例えば、本研究で取り上げる「わけにはいかない類」の場合、「わけにいかない」「わけにもいかず」なども含めた。

## III. 先行研究－「わけにはいかない」の意味用法の記述

「わけにはいかない」は、グループ・ジャマシイ(2002)で「一般的、社会的な常識や通念、過去の経験から考えてできない、してはいけない」と記述されているとおり、一般常識や社会通念からして「不可能である」「不適當である」という意味記述が主なものである。この意味記述は庵、高梨、中西ほか(2001)、大阪YWCA(2000)にも同様に見ることができる。また、吉川(2003)は「話し手の思い通りにはならないことを示す表現である」としている。「Vルわけにはいかない」と「Vナイわけにはいかない」の両者の前置動詞は、庵、高梨、中西ほか(2001)によって「意志的な動作を表す」とされているが、吉川(前掲)は「Vルわけにはいかない」のうち、特に「トイウ」が前接された場合には、その限りではないとも述べている。

また、那波(2013)によれば「わけにはいかない」という形式の意味は「行為の主體者にしかわからない個々の事情から考えて話し手が不適切だと判断すること」であ

り、主語に一人称をとりやすいことから説明ができると述べている。そのほかに、「わけにはいかない」の共起成分などを分析し、意味決定に関わる要因を探った富阪(2000)の研究もある。

「わけにはいかない類」の形式の意味として、しばしば用いられてきた「一般常識」や「社会通念」といった概念は、指し示す内容が漠然としており、日本語学習者が「わけにはいかない」の用法を学ぶ際に、理解しやすい説明であるかどうかは疑問である。

そこで、本研究ではまず、日本語母語話者コーパスでの「わけにはいかない類」の使用傾向を明らかにすることで、日本語学習者に対しても、より具体的な意味用法の提示が可能なのではないかと考えた。

## IV. 研究方法

本研究では日本語学習者の産出と日本語母語話者の産出の両方を調べる。まず日本語学習者の産出については、OPIの会話コーパスであるKYコーパスにおける「わけ」を含む表現の頻度数を調べ、日本語学習者における「わけにはいかない類」の使用傾向を探る。すなわち、筆者が<sup>1)</sup>で述べたとおり「わけにはいかない類」が学習者からの産出が見られない表現なのかということ、形式名詞「わけ」を含む他の表現と比較し概観する。

次に日本語母語話者の使用傾向を調べるため、「筑波ウェブコーパスにおける「わけにはいかない類」について、前接表現形式、前置動詞、前置副詞、などを中心に調べた。母語話者コーパスの代表的なものには日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)があるが、話し言葉に多く産出されることを想定し、より話し言葉に近い用法を得るためWEBコーパスを使用した。

## V. コーパスデータからみる「わけ」を含む表現

### 1. 日本語学習者コーパスにおける調査結果

日本語学習者の「わけ」を含む表現の頻度数を調べるために、本研究ではKYコーパスを調べた。KYコーパスとは、90名分のOPI資料から日本語学習者の発話部分を文字化したデータのことであり、学習者の母語は、英語、中国語、韓国語でそれぞれ30名分のデータからなっている。日本語学習者の「わけ」の産出頻度は、表2のとおりである。産出が確認された学習者のレベルは全て上級もしくは超級であった。

表2 KY コーパスにおける「わけ」を含む表現

	産出頻度
わけだ類	51
わけにはいかない類	2
わけがない類	1
合計	54

この表から「わけにはいかない類」「わけがない類」は「わけだ類」に比べて、出現頻度が非常に低いことがわかる。また、「わけにはいかない類」については、日中 Skype コーパス（中俣2015）や日本語学習者作文コーパス（金澤他2015）も調べたが、出現頻度は0だった。

## VI. 日本語母語話者コーパスにおける調査結果

次に、「筑波ウェブコーパス」における「わけ」を含む表現を調査した。頻度数は552,876と非常に多かった。なお、この中には実質名詞「わけ」も含まれている。この中から、「わけにはいかない類」を調べるため、文字列「わけに」を含むデータから、1021例を無作為に抽出し、「わけにはいかない」の前接部分が理解できなかった2例を除く1019例から、「前接する表現形式」、「前置動詞」、「前置副詞」、の頻度数を調べた。以下その結果について述べる。

### 1. 「わけにはいかない」に前接する表現形式

ここでは、「わけにはいかない」の前の動詞が現れる表現形式に着目した。表3はその結果である。

表3 「わけにはいかない」に前接する表現形式（頻度数6以上）

ナイ	102	テイル	41
トイウ	93	授受表現	19
使役形	44	テシマウ	6
テオク	42		

なお、表中の頻度数は互いに重複している場合もある<sup>1)2)</sup>。本研究では調査対象を「ルわけにはいかない」に限定し、「ナイわけにはいかない」については取り上げない。

### 1) 「トイウわけにはいかない」の用法

「ナイ」を除く919例の中では、引用節と共起する「トイウわけにはいかない」の頻度数が93と最も多かった。そこで「トイウ」の前接内容が確認できた58例を調べたところ、大きく2つに用法が分けられた。1つ目は「判断や見積もりが、安易に下された、もしくはその内容が甘いため、話し手にとっては承認できない」という用法である。以下の例はこの用法に該当するものである。

- (1) 「新人の子に分量だけ教えて、ハイ炊いて、というわけにはいかん。」
- (2) 簡単に的中というわけにはいきません。

(1)の「はい、Pというわけにはいかない」という形の例は、全部で4例あった。また(2)の「簡単に」という形容詞が用いられている例は、2例あった。

次に多かった用法は、「頻度(程度)を0、もしくは100とすることはできない」というものである。この用法に該当する例を以下に示す。

- (3) 身体に良いからと言っていつも手作りというわけにはいかない。
- (4) 残念ながらどこの病院でもというわけにはいきません。

(3)の例のように、引用節内に「いつも」がある例は全部で4例であった。この用法は、1つ目とも共通している。つまり、「聞き手が思っているほど簡単な話ではない」という話し手の意思表示である。この用法については、すでに富阪(前掲)も「聞き手の早急な結論を戒める目的で使用されることが多い」と指摘している。今回の調査結果より、日本語母語話者が非常に多く産出していることが明らかになった。

吉川(2003)は「トイウわけにはいかない」は、「トイウわけではない」に置き換え可能であるが、「トイウわけではない」の場合、聞き手の推論を否定するに過ぎないのに対し、「トイウわけにはいかない」の場合、話し手の「思い通りにならない」という気持ちを伝えることになると指摘しているが、上記の例文(1)(2)(3)(4)の下線部を「トイウわけではない」に置き換えた場合、すべての用例が聞き手の推論を否定する用法になるかどうかは議論の余地がある。

### 2. 「わけにはいかない」の前置動詞

次に「わけにはいかない」の前置動詞で頻度数が6以上のものについて表4に示す。

表4 頻度数6以上の前置動詞

負ける	20	続ける	11	任せる	7
あきらめる	16	引き下がる	10	無視する	6
死ぬ	14	認める	10	出す	6
放置する	13	見過ごす	8	逃げる	6
許す	13	聞く	8		
放る(放っておく)	12	帰る	7		

頻度数12の「放る」は、すべて「放っておく」という形であった。また、表4の中には、意志性のある動詞以外も含まれている。このことは、すでに那波（前掲）も指摘している。

今回調査した前置動詞の頻度数から「わけにはいかない」の用法の特徴には、次の3つのことが言えるのではないだろうか。

- [1]「負ける」「死ぬ」は、話し手が「実現しない」ことを強く希望する意味の動詞である。これらの動詞との共起は、話し手による望ましくない事態を避けたいという積極的な意志を表している。このことは「わけにはいかない」の用法のうち、「ナイ」が前接するものが1割を占めることとも関係があると思われる。
- [2]「あきらめる」「引き下がる」「帰る」「逃げる」は、話し手が関わっている事柄を最後まで遂行せず、途中で責任を放棄するという意味の動詞である。関わっている事柄について最後まで責任を持ちたいという話し手の積極的な意志を表している。
- [3]「放置する」「放る（放っておく）」「見過ごす」「無視する」は、話し手が関わっている事柄を放棄することによって将来その事態が悪化、もしくは深刻化する危険性があるため、それを阻止したいという意志を表している。

これら3つに共通することは、話し手が事態に積極的に関わりたいという意志の表明である。特に[2]と[3]は意味の領域に共通性が見られる。

### 3. 「わけにはいかない類」の前置副詞

最後に「わけにはいかない類」の前置副詞で頻度数が6以上のものについて表5に取り上げる。

表5 頻度数6以上の前置副詞

いつまでも	44	簡単に	9
そういう	34	いつも	8
このまま	25	いる	8
これ以上	20	ここで	8
だけ	10	誰でも	6

「いつまでも」「このまま」「これ以上」は頻度数の多い副詞である。このことから、これらの副詞を「わけにはいかない」の前接部分で用いることによって、「ある事態が現在の状態のまま続く、もしくは維持することに対する、話し手のマイナスの評価」を表していると考えられる。また、このことはVI-2「わけにはいかない類」の前置副詞の分析結果〔2〕,〔3〕とも共通性があり、「わけにはいかない」の用法全体にも関わる要素といえるのではないだろうか。したがって、副詞や「という」など形式的な特徴と意味が深くかかわっているため、これらを教科書記述に反映させることで、「わけにはいかない類」の意味の把握や使用が容易になると考えられる。

## VII. 従来の日本語教材における「わけにはいかない」

次に、日本語教材での「わけにはいかない類」の扱いについて述べる。本研究で用例を採取した教材は以下の6つである。

- 1) アジア学生文化協会留学生日本語コース (2008) 『完全マスター 2 級日本語能力試験文法問題対策』
- 2) 荒井礼子, 太田純子, 亀田美保ほか (2006) 『テーマ別中級から学ぶ日本語』
- 3) 大阪YWCA 日本語教師会 (2000) 『くらべてわかる日本語表現文型ノート』
- 4) 小柳昇 (2006) 『ニューアプローチ中級日本語基礎編』
- 5) 石橋玲子 (2008) 『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』
- 6) グループ・ジャマシイ (2002) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』

これらのうち, 1), 2), 4) は, 主に中級レベルの日本語教科書である。また, 3), 5), 6) については, 日本語教師や学習者のために作られた参考書である。いずれも2000年以降から出版されているものである。また, 日本語教科書については, 日本語能力試験が『旧日本語能力試験出題基準』に沿って施行されていた頃から使用されて

いたため、すべて「わけにはいかない」が学習文型として取り上げられており、練習問題にも挙がっている。

## 1. 中級日本語教材における「わけにはいかない」の用法

前節で取り上げた6つの中級日本語教科書において、「ルわけにはいかない」は31例あり、「ナイわけにはいかない」は12例であった。また、「ルわけにはいかない」の用例のうち、前置動詞で頻度数が高かったものは、「休む」の5例と「話す」の4例であった。

以下は、日本語教材における「休むわけにはいかない」の例文である。

(5) 疲れていても会社を休むわけにはいかないと思って無理をする人が多い。

『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』

(6) ちょっと熱があるが、今日は大事な会議があるので仕事を休むわけにはいかない。

『教師と学習者のための日本語文型辞典』

(7) テストがあるので、今日の授業は休むわけにはいかない。

『くらべてわかる日本語表現文型ノート』

(8) ちょっと熱があっても、会社を休むわけにはいかない。

『ニューアプローチ中級日本語基礎編』

(9) 社長が働いているのだから、社員が休んでいるわけにもいかない。

『くらべてわかる日本語表現文型ノート』

これらの例文に共通することは、話し手が「休むわけにはいかない」としていることは、会社や仕事、授業など、本来休むことができるならばそのほうがいいが、個人的事情のため休むことができないということである。

「筑波ウェブコーパス」における前置動詞「休む」の頻度数は2であり、決して多いとはいえない。また、2つのうち1つは以下のような用例である。

(10) かといってこのままズルズルと休むわけにはいかない。

(10)は、「このまま」とも共起しており「休む」は「休み続ける」ことと同じ意味である。前置副詞「このまま」は、表5にもあったように頻度数25と非常に多く、「いつまでも」「これ以上」と同様、「現状が続く、維持されることに対する話し手のマイナス評価」を表す。しかし、日本語教材に見られた「休むわけにはいかない」の用例に、



継続性の意味を表すものは1例も見られない。

次に、「話す」の例文について考える。

(1) これは誰にも話さないと約束したので、ほかの人に話すわけにはいきません。

『ニューアプローチ中級日本語基礎編』

(2) いくらあなたでもこのことだけは話すわけにはいかぬ。

『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』

(3) 絶対にほかの人に言わないと約束したので、話すわけにはいかない。

『完全マスター2級日本語能力試験文法問題対策』

(4) この話は極秘だから、家族にも話すわけにはいかない。

『くらべてわかる日本語表現文型ノート』

これらはすべて「話し手が第三者に情報を開示することができない(情報開示不可)」という固い意志を表しているものである。

一方で筑波ウェブコーパスにおける前置動詞「話す」の頻度数は4と多くはないものの、話し手による「情報開示不可」の意志表明を表す用例の頻度数は13であった。

## VIII. まとめと今後の課題

### 1. 「わけにはいかない」の主な用法

日本語母語話者コーパスから、「わけにはいかない類」の用法には大きく下記の3つに分類されるのではないかと考える。

[1]「トイウ」と共起し、聞き手もしくは第三者による判断や見積もりの甘さに対する話し手のマイナス評価を表す用法である。

[2]「死ぬ」「負ける」と共起し、それが実現しないことを強く希望する話し手の意志を表す用法である。

[3]「あきらめる」「逃げる」などと共起し、「今関わっている責任を放棄したくない」という話し手の意志を表す用法である。またこれに関連して「このまま」「これ以上」などが共起すると、責任を放棄することによって起こる事態の悪化や深刻化を懸念するという意味も含まれる。

## 2. 「わけにはいかない」をどう教えるか

従来の日本語教育文法でも「わけにはいかない」は、中級レベルで扱われることが多かったが、用法についての説明は「一般常識、社会通念、個人的事情などからそうすることができない」といったような非常に曖昧なキーワードを含んでいた。

また例文においても、「休む」「話す」など日本語母語話者の産出コーパスで頻度の低い動詞が使われている。その一方で、「という」や「いつまでも」など日本語母語話者が「わけにはいかない」と共起させている表現や副詞はほとんど使われていない。

庵（2015）が決めたコーパスの出現頻度に基づく新しい文法シラバスにおいても、「わけにはいかない」は中上級レベルに属し、理解（読み）だけでなく産出（書き）が必要な項目であるとされている。従来の中級レベルの日本語教材における「わけにはいかない」の扱われ方は、庵の考えにも従っている。しかし、今回の調査で日本語教材における「わけにはいかない」の例文は、日本語母語話者の使用傾向とはかなりのずれがあることもわかった。このことを踏まえ、「わけにはいかない」をどう教えるか、という点について、筆者の提案を3つ述べたい。

- [1]「わけにはいかない」の意味を説明する際には、「一般常識、社会通念、個人的事情」など曖昧な単語を用いるのではなく、話し手がどのような意志を表明しているのかに着目して説明する。
- [2]「わけにはいかない」を用いた例文を提示する際には、「という」「あきらめる」「負ける」など、積極的に使用する。
- [3]「放っておく」「放置する」や「これ以上」「このまま」なども、「わけにはいかない」とセットで覚えられるようにする。

## 3. 今後の課題

今回は「わけにはいかない」の中でも、「ルわけにはいかない」に限定して調査を行ったが、同様に「ナイわけにはいかない」についても調査を行う必要がある。また、その際には「ルわけにはいかない」との共通性にも着目する必要があるだろう。さらに、「わけだ」や「わけがない」についても調査し、形式名詞「わけ」を含む表現の共通性についても検討し、指導方法について考える必要がある。これらはすべて今後の課題である。

#### 【注】

- 1 小嶋 香織（金沢大学大学院）、松田真希子（金沢大学）
- 2 例えば「あれをいつまでも遊ばせておくわけにはいかん。」という例は、「使役形」、「テオク」の両方にカウントした。

#### 【付記】

本研究は JSPS 科研費15K02583, 25580109の助成を受けたものです。

#### 【引用文献】

- 庵功雄, 高梨信乃, 中西久美子, 山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 庵功雄 (2015) 「日本語学的知見からみた中上級シラバス」『現場に役立つ日本語教育研究1 データに基づく日本語文法シラバス』くろしお出版
- 石橋玲子 (2008) 『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』凡人社
- グループ・ジャマシイ (2002) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (1994) 『日本語能力試験出題基準』凡人社
- 富阪容子 (2000) 『『わけにはいかない』わけの分析』『言語と文化 甲南大学国際言語文化センター紀要』第4号, 132-142.
- 那波理絵 (2013) 「『わけにはいかない』の意味用法－「不適切」と「不可能」の近接性－」『日本語文法』13巻2号, 139-154.
- 吉川武時 (2003) 『形式名詞がこれでわかる』ひつじ書房

#### 【分析に使用した日本語教科書】

- アジア学生文化協会留学生日本語コース (2008) 『完全マスター2級日本語能力試験文法問題対策』スリーエーネットワーク
- 大阪YWCA日本語教師会 岡本牧子・氏原庸子・砂辺太郎 (2000) 『くらべてわかる日本語表現文型ノート』大阪YWCA日本語教師会
- 荒井礼子・太田純子・亀田美保ほか (2006) 『テーマ別中級から学ぶ日本語』研究社
- 小柳昇 (2006) 『ニューアプローチ中級日本語基礎編』日本語研究社

#### 参考資料・コーパス

- 日本語学習者作文コーパス, 科研グループ「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」(<http://sakubun.jpn.org/>) [2016年1月31日アクセス確認]
- タグ付きKYコーパス, 科研グループ「コーパス分析に基づく認知言語学的構文研究と日本語教育文法への応用」(<http://jhlee.sakura.ne.jp/kyc/corpus/>) [2016年1月27日アクセス確認]
- 筑波ウェブコーパス, 国立国語研究所 (<http://nit.tsukuba.lagoinst.info/>) [2016年1月27日アクセス確認]
- 中俣尚己 (2015) 『日中 skype 会話コーパス』([http://nakamata.info/about\\_skype\\_corpus.pdf](http://nakamata.info/about_skype_corpus.pdf)) [2016年1月31日アクセス確認]
- 金澤裕之 編 (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房

# **A corpus-based analysis of the Japanese phrase “Wakeniwaikanai” -Comparative with traditional grammar for Japanese Language Training-**

Kaori Kojima and Makiko Matsuda

## **Abstract**

WAKENIWAIKANAI is one of the least used forms by intermediate Japanese learners in class. However, it is one of the forms that intermediate to advanced Japanese students really should learn to use. This research reveals the meaning and use of this form by calculating the frequency of enclitic phrases, verbs and adjuncts in the Japanese native corpus. This study also demonstrates the differences between the standard teaching materials and methods and the way this form is used by Japanese native speakers. Therefore, we propose this new teaching guidance of WAKENIWAIKANAI on the basis of these results.